

「きたほなみ」の能力を生かすために

[平成23年8月・北海道農政部]

23年産秋まき小麦は、細麦傾向で整粒歩留りが低下し、収量が期待を下回る見込みとなっています。要因の詳細については現在、各普及センター・試験場と解析を進めていますが、現時点で考えられる要因は、

- ①高温によって登熟期間が短かったこと(十勝▲5日、網走▲3日)
- ②起生期以降の天候不順(起生期～幼形期までの降水量平年比182%)により根の張りが緩慢となり、加えて7月中旬の集中的な多雨(平年比177%)により根の活力が低下し枯れあがりがあったこと
- ③越冬茎数が多く、倒伏を懸念して起生期からの分追肥を控えたほ場があったこと
- ④道東方面を中心に7月10日頃より葉枯れ症状(ミクロドキウム、ニバーレによると思われる)が多発したことなどが挙げられます。

これら要因の解決を図ることで、整粒率は上昇し収量確保につながります。今後、作業の順番に合わせてそのポイントをまとめましたので、実践をお願いします。

ポイント1 後半まで健全な生育をめざす

■地域ぐるみで透排水性改善による根張りの確保■

ア、明暗渠や傾斜均平などの基盤の整備 イ、転作地帯では簡易明渠の設置
ウ、心土破碎により耕盤層の破碎 エ、鎮圧により根の浮き上がりを押さえる



根圏域の拡大が重要

ポイント2 止葉期に追肥のできる生育をめざす

■倒伏を避けるための越冬前目標茎数は 650～1,000本/m²程度■

・倒伏の心配が無く、止葉期に追肥できる麦の姿に生育させることが重要。

きたほなみは1穂粒数が多く、生育後半に窒素が不足すると整粒歩留りが低下する

生育後半(止葉期・出穂期)の窒素施肥が、粒重増加に働く

・越冬前の目標茎数確保のため、は種時期・は種量は表1・表2を参考とする。

表1 地域別のは種適期

上川 道央北部 羊蹄山麓	道央中部 (気象・越冬条件が比較的厳しいところ)	道央中部 道央南部	留 萌	十勝 林-ツ	オホ-ツ内 陸 (気象・越冬条件が比較的厳しいところ)
9月12日 前後	9月15日 前後	9月20日 前後	9月22日 前後	9月19～ 28日頃	9月16～ 20日頃

表2 適期におけるは種量と越冬前の目標葉数と目標茎数

項 目		道央・道北	道東
は種量 (粒/m ²)		100～140	140
は種量 (kg/10a)	千粒重40gの場合	4.0～5.6	5.6
	千粒重36gの場合	3.6～5.1	5.1
越冬前目標茎数		1,000本/m ² 程度	650本/m ² 程度
越冬前目標葉数		5.5～6.5葉	5葉(4～6葉)

は種にあたっての留意事項

は種量: ほ場での出芽率が90%確保できることを前提にした設定。碎土性が悪い等で出芽率が低下することが予想される場合は、は種量の調節が必要となる。

種子粒重の確認: 種子の千粒重を必ず確認し、は種機を調節する。

は種時期: 遅くなると越冬性が劣り冬損害を受けやすくなる。

基 肥: 窒素施肥は4kg/10aとする。土壌からの窒素供給が高いと見込まれる場合は2kg/10aとする(道東)。

ポイント3 登熟期間を確保

■春以降の生育を早め、出穂期を遅らせない栽培管理が重要■

ア、適期は種の励行(遅まきをしない)

イ、雪腐病防除の徹底(罹病株は起生期以降の生育が緩慢になる)

ウ、融雪の促進

エ、土壌環境の向上:pHの改善、有機物の施用

ポイント4 病害虫防除の徹底

■土壌病害の回避■

ア、3年以上の輪作による土壌病害回避(立枯病・縞萎縮病・眼紋病)

イ、雪腐防除の徹底